

十津川（熊野川）を語る会 議事骨子

開催日時 平成 17 年 10 月 22 日（土）13:30～16:00
 開催場所 十津川住民ホール（十津川村役場内）
 出席者 担当委員 橋本委員（進行役） 井伊委員、高須委員
 同席委員 浦木委員、木本委員、清岡委員、瀧野委員、中島委員、古田委員、吉野委員
 意見発表者 更谷慈禧氏、野尻忠正氏、小西密晴氏、下野拓也氏、東住雄氏、藤村司朗氏

「十津川（熊野川）を語る会」を開催し、十津川村を代表する方々による十津川との係りや村の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようである。

1. 熊野川懇談会について

- 河川管理者により河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(1) 地元代表者による意見発表

- 十津川村は古くは八咫鳥(やたがらす)〔神武の東征〕の時代まで遡る歴史を有する。また面積日本一の村であり淡路島、琵琶湖より広く、豊かな自然や温泉、世界遺産がある。一方人口は減少し過疎、高齢化が進行している。コンビニもなく光も少ない村であるが、だからこそ残された今忘れられた日本人の心がある。先人への感謝を持って、危機をチャンスに変えて村づくりを進めて行きたい。ダムにより電気等の恩恵を受けた反面、失ったものは多い。スギやヒノキの植林後、手入れを怠ったことが川を濁らせた一因である。我々は下流に対して源流としての責任がある。ダムがあっても濁りを抑える手立てを立てたい。川を治めるためには山を治める必要がある。その輪をもっと広げて行きたい。【更谷氏】
- 昔はアユを始めとして様々な魚が生息していた。熊野川街道を遊歩道として整備し、歩いて山を越え自然を実感出来ることは、十津川らしさのひとつである。昔は河川がゴミ捨て場であったが、近年ではゴミは捨てられなくなり清掃活動も行われている。村外からも川遊びに来て帰っていただく。その際には川に来ることによって自らの心もきれいになれる、そんな川を大切にしていきたい。【野尻氏】
- ダムにより村民の夢が壊されたのではないか。ダムがなければもっとアユが遡上したかもしれない。山と川は切っても切れない関係である。毎日、山の手入れを行うことが、川への貢献に繋がっている。【小西氏】
- 十津川村は川沿いに発達した村で、アユ釣りや材木切りが盛んであった。明治 22 年には、山の荒廃が原因で大水害が発生した。江戸時代には銅山が掘られたため、杉や榎の木がなくなり、鉱毒が流出してアユがいなくなった。中学校では、なぜ淵がなくなったかを研究・発表しており、生徒達は十津川の環境の変化に興味を持っている。【下野氏】
- ダムにより電気、道路等の恩恵を受けた反面、失ったものは多い。ダムを造ったからには、最大限活用する必要がある。いつも青く美しいダム湖であるようにしたい。海では砂浜が後退しているが、上流でも溪流が侵食されている。土地状況を勘察すると植林していないため、山の荒廃が進んだ。下流へきれいな水を供給するのは上流の義務であり、いかにして山から土砂を出さないかが重要課題である。砂防堰堤に代わって、サワグルミによる補足効果にも着目して利用を図るべきである。【東氏】
- 砂利浚渫にも限界があり、年間 50 万 m³以上の堆砂量に対して搬出が追いつかない。堆砂により水位が上昇し山腹崩壊等の被害が拡大しており、抜本的な対策が必要である。【藤村氏】

(2) 一般傍聴者も含む全体での意見交換

- ・ ダムの影響で水が冷たく濁って河川環境が悪くなっており、アユが生息出来ない状況である。植林後の手入れを怠ったため、山の保水力が低下して土石流が発生しやすくなり、これらが堆積して瀬も淵もない川となっている。子供達が泳ぐ場所もなくなっている。(傍聴者)
- ・ 上流から下流までのネットワークは重要である。上流で努力していることを下流にも伝えていただきたい。(更谷氏)
- ・ 風屋ダムの水を下流へ流したいが、濁った水となるため下流から反発がある。本宮町辺りの瀬切れ区間を改善して欲しい。観光資源として筏流しを復活したり、子供たちが魚釣り出来る場所を増やして欲しい。(野尻氏)
- ・ 河川敷の仮置き残土が大水の時に流出して問題となっている。(小西氏)
- ・ 村民ぐるみで子供から大人まで取り込んで学習していきたい。全国川サミット等、子供達の発表の場におけるネットワークは広がっている。(下野氏)
- ・ 本宮町辺りの瀬切れ区間を改善して欲しい。(東氏)
- ・ 浚渫した砂利を運搬して海に帰すなどの対策も考えればよい。(藤村氏)
- ・ 人口は毎年60~80人減少している。若者が帰ってきてても働き先がない。林業不振で150社が現在は2社となっている。林業から建設業へと移行しており、70社程度の業者がある。山と川を守るのがこれからの観光であり、心身再生の里を目指す。ガードレール等へ間伐材を積極的に利用する。(更谷氏)
- ・ どの程度造林するかが重要であり、有用なものを育て価値を高めるために間伐や枝打ちを行うことで、環境保全への効果も期待できる。(東氏)

以上